

「あっちゃ～……」

（またやっちゃった……）

午後の柔らかな光が差し込む、誰もいない給湯室。床に散らばった茶葉と、跳ねた滴を見つめて、私は情けない溜息をついた。お茶を淹れようとして、缶が手から転がってしまったのだ。最近、仕事のミスが続いていて、ただでさえ自信を失いかけていたのに。こんな些細なことすら満足にできない自分に、情けなさがこみ上げてくる。

「……またか。お前は本当に」

「えっ……！？」

背後から降ってきたのは、呆れを滲ませる、低く心地よい声。振り返る間もなく、すぐ近くで、ふわりと鼻を突く、ビターなコーヒーと強い煙草の匂い。

「し、柴崎さん……！ 申し訳ありませんっ、すぐに片付けます……！」

慌ててしゃがみ込もうとした私の視界に、磨き抜かれた革靴と、すらりと長い脚が映る。顔を上げると、そこには着崩したスーツから大人の男の色気が溢れる、柴崎さんの姿があった。

私たちの部署を率いるリーダーである柴崎さんは、社内でも有名なエリートだ。

二十九歳という若さで圧倒的な数字を出し続ける彼は、自分にも他人にも厳しいけれど、その実力から、誰からも頼りにされている。

そして整った顔立ち。鋭い二重の瞳に、高く通った鼻筋は精悍さを感じさせる。

その瞳に見据えられるだけで、心臓の奥がキュウと締め付けられるような、奇妙な高揚感が生まれてしまう。

「いい、俺がやる。お前のその危なっかしい動きを見ていると、こっちが落ち着かない」

「うう……、すみません……」

柴崎さんは、大きな手でネクタイを少し緩めると、

私が掴んでいたふきんをひょいと取り上げた。その時、指先がかすかに触れ、心臓が跳ねた。熱い。ほんの一瞬触れただけなのに、そこから電流が走ったかのように、体温が跳ね上がるのを感じた。

「……お前は一生懸命なのは認めるが、ちょっとそっかしいところがあるな」

柴崎さんは困った子供を見るような、甘さと苦みを含んだ視線で見下ろした。

「はい、すみません……」

「これから気をつけてくれればいいさ、期待している」

そう言って、柴崎さんはふっと口角を上げた。普段の冷徹な上司の顔とは違う、大人の余裕を感じさせる微笑み。

（ダメ。そんな顔で見られたら、余計に心臓が持た

ないのに……)

私は顔が赤くなるのを隠すように俯いた。柴崎さんは手際よく茶葉を片付けると、奪っていたふきんを私に返そうとして——けれど、その手は私の手元で止まった。

「……お前。さっきから身体が強張っているな」

「えっ、あ……それは……」

(柴崎さんと一緒にいると、緊張しているから、なんだけど……)

「そんなに肩に力が入っているから、手元が狂うんじゃないか？ ……お前は、自分の身体の使い方がわかっていないな」

柴崎さんはふきんをカウンターに置くと、私の背後に一步、静かに踏み込んできた。

「ひゃっ……！？」

(……っ、近い……！ 背中に、柴崎さんの胸板が

……っ)

逃げようとしたけれど、背後には彼の逞しい身体、前にはステンレスのシンク。私は柴崎さんの腕の中に閉じ込められる形になった。

柴崎さんの大きな掌が、私の両肩をガシリと包み込んだ。熱い。ワイシャツ越しでも伝わる彼の体温に、背筋にゾクゾクとした震えが走り抜ける。

「無駄な力が入りすぎだ」

耳元で囁かれるたびに、彼の熱い吐息が首筋を撫でる。

「あ、の……柴崎さん……？」

柴崎さんはゆっくりと私の肩から手を離すと、すっと立ち上がり、私の正面へと静かに回り込む。移動しようとしたが、柴崎さんは一歩、私のパーソナルスペースを無慈悲に踏み越えてきた。

「俺がその緊張を解いてやろう……♡」

柴崎さんの大きな掌が、私の頬をそっと撫でた。その指先はそのまま首筋を滑り、鎖骨の窪みをなぞり、ゆっくりと胸元へ向かった。

「え！？ ひゃっ、やめ……っ！」

ブラウスの一番上のボタンに、彼の指がかかる。プチッ、プチッと、静かな室内でボタンが弾ける音が響く。暖かな指先が時折素肌に触れるたび、私の心拍数は跳ね上がり、呼吸が浅くなる。

（な、なんで……っ、柴崎さん……っ！？）

混乱している間にも彼の指は止まらず、あっという間にブラウスがはだけ、インナーの上から、柴崎さんの大きな手が私のおっぱいをブラ越しにぎゅっ、と鷲掴みにした。

「んんっ……！？♡」

指がゆっくりと動き、むにゅ♡と私のおっぱいの柔らかさを確かめるように、深く揉み解していく。指先がブラの生地を押し込み、乳首の突起を強引に探し当てる。ぐにぐにと押し潰される感覚に、頭の芯が痺れるような快感が広がる。

むにゅむにゅ♡ むにゅむにゅ♡ らにらに♡

「ふ、あ……っ、はぁっ、んんっ……♡」

羞恥と、彼に支配されているという抗えない高揚感。ブラ越しなのに、身体の芯がじんわりと疼き始める。

むにゅむにゅ♡ らにらに♡ らにらに♡

「あ……ぁんっ、あ、だ、め……♡」

「……どうした、もう少し力を抜け」

低く掠れた声が、私の耳元で熱く響く。逃げ場の

ないシンクの縁に腰を押し付けられ、私は彼の逞しい胸板と冷たいステンレスの間に挟まれて、ただ翻弄されるしかない。

「……んんっ、あ……っ！ 柴崎、さん……っ♡」

柴崎さんの大きな掌が、私のタイトスカートの裾から、太ももをさらりと撫でた。

「っ……！」

（うそ、そこまで……。なんでこんな……っ！？）

戸惑う間もなく、彼の指先はさらに奥へと滑り込み、ショーツ越しに私のおまんこを揉み始める。

ぐにゅ♡ ぐにゅ♡ ぐにゅ♡ ぐにゅ♡

「あ♡ んんっ♡ し、柴崎、さん……っ♡」

「……何だ？ まだ力が入りすぎているな♡」

（そんなこと言われたって……っ。柴崎さんの手が熱すぎて、頭の中がぐちゃぐちゃなのに♡）